

琉球語と古代朝鮮語の比較言語学的考察

橋尾 直和

(2011年10月3日受付, 2011年12月19日受理)

A Comparative Linguistic Study of the Ryukyuan Language and Old Korean

Naokazu HASHIO

(Received: October 3, 2011, Accepted: December 19, 2011)

要 旨

琉球の古歌謡集『おもろさうし』の「てだがあな」は、〈太陽の穴〉と解釈されている。つまり、〈太陽が出入りする場所〉と見なしている。これと並行して、「あがるい」は〈東方〉と解釈されている。つまり、〈太陽の昇る方〉と見なしている。これらに対して筆者は、「てだがあな」も「あがるい」も〈太陽神〉であると結論づけた。本稿では、ほぼ定説となっているこれらの語について、琉球語と古代朝鮮語との比較を中心に解釈し、地名の「今帰仁」「喜界島」も加えて、語源解釈の新説を提唱した。

キーワード：琉球語、古代朝鮮語、てだがあな、今帰仁、喜界島

Abstract

The expresesion 'Tedaga Ana' in *Omorosaushi*, the Ryukyuan compilation of songs and poetry, is interpreted as 'a hole of the sun', i.e. 'the sun's entering place'. Also, the expression 'Agarui' is interpreted as 'the East', i.e. 'the direction of the sunrise'. On the other hand, the author of this paper concludes that the two expressions are interpreted as 'the god of the sun'. This paper proposes new interpretations of the two expressions with a focus on the comparative study of Ryukyuan language and Old Korean. This paper also proposes the new etymology of the place names, Nakijin and Kikaijima.

Key Words: Ryukyuan language, Old Korean, Tedaga Ana, Nakijin, Kikaijima

1. はじめに

琉球の古歌謡集『おもろさうし』にある「てだがあな」は、〈太陽の穴〉と解釈されている。たとえば、『日本思想大系』18の『おもろさうし』（「第十 ありきゑとのおもろ御さうし」）p.189には、次のように表されている。頭注には、「てだが穴 太陽の穴。東方の意」とある。

又 あがるいは たかべて 東方は崇べて

又 てだがあなは たかべて てだが穴は崇べて

〈太陽の穴〉説は、伊波普猷氏の『古琉球』（1942）p.433の「てだがあな」の解説において、「てだがあな」には太陽の穴の義あり。（中略）東方の議にも用ゐらる」とあるのが最初と見られる。〈太陽の穴〉とする語源解釈は、後の琉球文学・言語研究に受け継がれている⁽¹⁾。

この説に疑問を呈したのが村山 (1995) p.151である。村山氏は、琉球語とオーストロネシア語を比較し、「てだがあな」のアナ ana を原始オーストロネシア語の *lapit₂ にさかのぼるとし、〈天空〉であると解釈した⁽²⁾。そして、次のような経過によって ana に発達したとする。*lapit₂ > *laja > *hana > ana

筆者は、伊波説も村山説も採用しない。橋尾 (2007) において、琉球語の「グスク」「ニライ・カナイ」、橋尾 (2008) において、琉球語の「カラジ」の語源解釈を試みた。その結果、琉球語の成立に当たっては、オーストロネシア語とアルタイ諸語のみならず、朝鮮語と中国語の影響が濃厚であることが判明した。「てだがあな」のアナ ana は、なかでも古代朝鮮語と関係があることが分かった。本論では、琉球語の成立に当たって、古代朝鮮語との言語接触の観点に立脚した語源解釈を展開したい。ここでは、「てだがあな」「今帰仁」「喜界島」の従来の語源説を再検討することを目的とする。

2. 「てだがあな」の新解釈

村山氏が「てだがあな」の「あな」を「天空」とする根拠は、まず、台湾とフィリピンのルソン島との間のバタン諸島の言語で原始オーストロネシア語における *a、*ə、*u の前の *l- (すなわち、*la、*lə、*lu) が φ (ゼロ) か、h-かχ-となっていることである。バタン諸語の「空」の語形は、Lists of Selected Words of Batanic Language, No. 480には、次の例が挙げられている⁽³⁾。

Imorod 語	apit
Iraralay 語	hanyit
Itbayat 語	χanyit
Ivasay 語	} hanyit
Isamorong 語	
Babuyan 語	

また、原始オーストロネシア語 *lətup 「白」は日本語で usu、琉球語首里方言で、'uusi、喜界島で usu で、これらの語形は *lətup > *lusup > usu と変化がみられ、同様に *ə、*u の前の *l- が φ (ゼロ) となる例があることである。これらのことを考慮して、村山氏は、次のような経過によって ana に発達したとみなす。*lapit₂ > *laja > *hana > ana つまり、アナは「天空」と解釈する。

さらに、村山氏は、「てだがあな」の「てだ」について、タガログ語 dilag 〈輝き、輝くこと〉 (d|um|ilag 〈輝く〉、ma|rilag 〈輝くところの〉) を土台とし、Zorc (1971) で再構された原始フィリピン語 *dilag にさかのぼるとしている。*dilag 〈輝き〉は「照ら」との結びつきを考えている。すなわち、「てだがあな」は、〈天空の輝き〉すなわち〈太陽〉を表すと解釈する。筆者は、村山氏が「てだがあな」の「あな」を〈穴〉ではなく、〈太陽〉であると見なした点については、卓見であると考ええる。

ただし、アイヌ語の〈天空〉 nis (<*nit₂)、台湾のツォウ語 Ꞥca (<*ɲic|a <*lapit₂|a) と琉球語のアナ ana (<*laja <*lapit₂) がすべて同源と解釈する点については、筆者は賛同できない。橋尾 (2007) で「ニライ・カナイ」の原型「ギライ・カナイ」の「ギライ」が、原始オーストロネシア語の *lapit₂ 〈天空〉にさかのぼることでは、意見が一致している。結論から先に述べると、「てだがあな」の「あな」は原始オーストロネシア語ではなく、古代朝鮮語にさかのぼることができ、その意味は〈太陽神〉である。

まず、最初の問題点であるが、伊波普猷氏を初めとする琉球研究者の『おもろさうし』の解釈が、「あがるいは たかべて」が「東方は崇べて」、「てだがあなは たかべて」が「てだが穴は崇べて」とすることである。「崇べる」は〈崇める〉ことであるが、方向・場所を〈崇める〉ことに違和感を持った。筆者は、崇める対象は、〈太陽〉すなわち〈太陽神〉そのものではないか、と推定した。

次の問題点は、伊波氏をはじめとする従来の説の根本的な誤りは、「あがるい」を〈東方〉すなわち「あがり(東)」と「へ(辺=方)」と解釈した点ではなかつたのだろうか。ちなみに、『おもろさうし』では「あがるい」は一度も「あがるひ(〈へ〉)」として現れない。崇べる対象が〈太陽〉でなく「方向」であるとすれば、それとパラレルに「てだがあな」は〈太陽〉ではなく〈穴〉という「場所」であるとの類推が働いたのではないだろうか。

筆者は、崇べる対象が〈太陽〉ではないか、との推測のもと、「あな」の説明のありかを探ってみた。

その結果、『古事記』『日本書紀』の神話に登場する祭神名「大己貴」にさかのぼることが分かった。「大己貴」は、oho-ana-mutsiの表記である。別名の「大穴牟遲・大穴持」は、oho-ana-motsiの表記である。この神は大国主神で、素戔嗚尊の子とも六世孫とも言われている。琉球語「てだがあな」の「あな」はoho-ana-mutsi・oho-ana-motsiのanaと結びついているのである。

このことを証明するためには、古代韓国語地名から紐解かなければならない。

李炳銑氏は、『日本古代地名の研究—日韓古地名の源流と比較—』(2000) p.55-56で、日本の祭神と古代韓国語地名との比較研究によって、次のように述べている。

『書紀』安閑2年紀の婀娜国、同書の垂仁2年紀と、欽明22年紀にみられる穴門、『古事記』景行紀の穴戸と『国造本紀』の吉備の穴国にみられる「婀娜」「穴」は、元来、古代韓国語の‘主’あるいは‘王’を意味するaraから変化したものである。このara(>ana)はto‘地’あるいはna‘壤・地」と合成されて‘王邑」という名詞をつくる。韓国咸安の古代地名「阿尺良」(*ara-na)は、このana‘王’とna‘壤’の複合語である。古代地名にみえる安城・安邑などの「安」も「安」の韻尾-nの外破音化による*anaの表記で、日本の地名の穴(アナ)と同じものである。『周書』百濟条に、百濟で王を「於羅瑕」と呼んだことから知ることができる。この於羅瑕は*əra-ka(-kaは接尾語)の表記であるが、*əra(於羅)はaraから変化したものである。

古代韓国語地名にみられる五伽倻の一つである阿羅国(『三国史記』地理志)の首都である「阿尺良」のara(阿尺)は、百濟の王城「慰禮城」(*əra-tsai)にみられる*əra、百濟語の‘王’を意味する「於羅瑕」(*əra-ka)のəraと同源であることが分かる。

李氏は、さらにこのaraは、‘主・王’を意味する*naraにさかのぼるとする。

*nara > *jara > *jara > *ara(阿羅) > ana(阿那)

上記のana(阿那)は、『日本書紀』の婀娜国・穴門、『古事記』の穴戸と『国造本紀』の穴国にみられる「婀娜」「穴」に比定できる。

ところで、出発形の*naraを再構する根拠は何であろうか。李(2000) p.145では、*naraの原義を〈主〉すなわち〈王〉と解釈し、その根拠を以下のように述べる。

‘王’を韓国語では漢語で「主」「君主」「主上殿下」というが、これを韓国の固有語で나라nim nara-nim(나라nimは尊称接尾辞)という。また、主の居住する所(朝廷)をnara-ptil(延:『類合』下23)という。それは主(主・君主)が居住するptil(庭)、すなわち‘朝廷’の意味で、nara‘主’はptil‘庭’を修飾(冠)している。そして、今日‘国家’を意味するnaraは、王が居住した‘主城’すなわち‘王城’の意味から拡大され、派生したものである。古代城邑国時代には、王が居住した‘主城’が正に国家であったのである。このnara‘主’とnara‘国’の語は韓国でも日本でも同様であったと考えられる。「奈良」は‘主’すなわち‘王’を意味するnaraの表記で、「奈良」は被修飾成分であるhara‘城邑’が省略された表記である。

筆者は、この*naraから変化したanaこそが、「てだがあな」の「あな」であると考え。‘主’すなわ

ち「王」を意味する *nara から n- が口蓋化して j- となり、さらにこれが脱落して ara が生じ、さらに r>n の変化を経て ana になったものと推定できる。したがって、「てだがあな」は〈太陽の主・王〉すなわち〈太陽神〉である⁽⁴⁾。*nara > *jara > *jara > *ara > ana

それでは、対になっている「あがるい」については、どう解釈すべきであろうか。

『おもろさうし』（「第十 ありきゑとのおもろ御さうし」）p.189を再掲する。

又 あがるいは たかべて

又 てだがあなは たかべて

「てだがあな」が〈太陽神〉であるとすれば、崇べる対象である「あがるい」を〈東方〉という「方角」と解釈してよいのか、という疑問が生じる。筆者は、「あがるい」も〈太陽（神）〉そのものではないかと考える。その根拠は、「あがるい」の「い」を「へ（辺＝方）」と解釈するのではなく、「ニライ・カナイ」の「イ」と同源とみる。筆者は橋尾（2007）において、「ニライ・カナイ」が「ギライ・カナイ」にさかのぼり、「ニラ・イ」と「カナ・イ」の「イ」を名詞化形成接辞の -i と解釈した。アイヌ語のカムイも同様「カム・イ」と分析できる。したがって、「あがるい」は「アガル・イ」と分析でき、〈（東方から）あがるもの＝太陽神〉であると解釈できる。このことから、「あがるいは たかべて」と「てだがあなは たかべて」は、いずれも〈太陽神を崇めて〉となり、同じ意味の繰り返しであると解釈できる。

「あがるい」の語源を、*agaru-pe 〈太陽の上がる方角〉のように方向接辞 -pe が接続したものと解釈するのではなく、筆者は、*agaru（あがる）に名詞化形成接辞の -*ji が接続したものととらえる。つまり、*agaru-ji 〈（東方から）あがるもの＝太陽神〉にさかのぼると解釈したい。この名詞化形成接辞の -*ji は、アイヌ語 kamuy = kamuj 〈神〉を考慮して、名詞化形成接辞を -*i ~-*ji ~-*j と再構したためである。

3. 地名「今帰仁」の新解釈

沖縄の本部半島北部に位置する村落で、三山鼎立時代琉に北山王が居城した今帰仁城が置かれた場所である地名の「今帰仁」は、『海東諸国紀』（1471）の中の「琉球国之図」に「伊麻奇時利（イマキジリ）城」として登場し、『おもろさうし』で「みやきせん」と謡われた。「玉御殿の碑」（1501）に「ミヤきせん」、『琉球神道記』（1605）に「今鬼神」、さらに『琉球渡海日々記』（1609）に「今きじん」、『喜安日記』（1609）、『辞令書』（1643・1652・1656・1664）、『琉球国由来記』（1713）、近世の天保・元禄期の『琉球国絵図』に「今帰仁」と記され、『琉球国絵図』では「いまきじん」と読ませている。文献からは、「今帰仁」という漢字が当てられるようになるのは17世紀頃になってから、ということが分かる。

伊波普猷氏は、北方からの渡来者が本部半島に移り住み、その新来者（イマキ）に由来すると解した（『あまみや考』⁽⁵⁾）。島袋源七氏は、ナキジンの古い発音はナキズミで、そのナキズミは魚来住＝魚が来て住む場所、あるいは魚が多く寄りつく場所と解している（「今帰仁を中心とした地名の一考察」⁽⁶⁾）。また別に、「今帰仁は古くマキジン又はイマキジリ・マキジリと呼ばれ、地勢上国上（頭）に対するマキ（村）下・マキ尻の義である」といった見解もある（「島尻・今帰仁考」泉奇山⁽⁷⁾）。村名は、近世以来の間切名による。「今帰仁」は古くは「伊麻奇時利（いまきじり）」・「みやきせん」と記し、これについては、谷川健一氏が、『列島縦断 地名逍遥』（2010）pp.175-176で、次のように解説している。

今帰仁は方言ではナチジンというが、『おもろさうし』では「みやきせん」となっている、また玉陵碑にも「みやぎせん」とある（ママ）。ところが、朝鮮の申叔舟があらわした『海東諸国紀』には「いまきじり」と表記されている。伊波普猷は、これに着目して「今来」つまり新来者の意に解する。つまり新来の統治者の居住地の名称とする。

これに対して東恩納寛博は、新来者が今帰仁半島にやってきたという史実は、推定にすぎないと言う。そして「いまきじり」と記しても発音は「みやきせん」あるいは「みやちぢん」と言っていたのではあるまいかと述べている⁽⁸⁾。また島袋源七は豊漁地を意味する「魚来住」(なきずみ)に由来すると述べている。いずれにしても今帰仁の地名の由来は定説がない。

さらに、谷川氏は、「為朝は今帰仁に近い運天に上陸したのではないかと、伊波は推量している」と述べ、「為朝渡来の伝承地」としての「今帰仁」について解説している⁽⁹⁾。

このように、「今帰仁」の「今帰」は *ima* (今) に対して、〈新〉の意味に解釈され、「今来」のつく地名と比定し、〈新来〉の意味に解釈されてきた。しかし、古代朝鮮語と比較した結果、「今帰」は〈王邑〉〈王都〉であることが判明した。

李 (2000) p.83 によれば、「今」は、元来〈主〉を意味する *ima* に由来したもので、これは韓国語の *임* (*nim*) と同源語である。これが土地の形状名に使われる時には、その付近で〈主な土地の形状〉を意味する。ゆえに、*ima-ki* (今来) の *ima* (今) は、*nima-na* (任那) の *nima* (任) と同様に、韓国語による〈主〉の意味であり、「今来」は〈主〉すなわち〈王〉または長者が居住していた所で、群小邑落国時代の〈王邑〉〈王都〉の意味であると考えられる。*nima* が *ima* に変化したのは、第1音節の *ni* が母音の *i* の影響で口蓋化して *pi* となり、そして子音の *n* が脱落したためと考えられる。*nima* > *pima* > *ima*

mima-ki (御間城) と *mima-na* (任那) も同源の地名で、*-ki* (接尾辞) と *na* (壤) の相違があるだけである。これらから、*ima-ki* (今来) (今帰) と *mima-ki* (御間城) と *mima-na* (任那) は同源の地名であることが分かる。また、李氏は御間城天皇 (崇神天皇) の名は、大和の三輪山付近にあった *mima-ki* 地名に由来するものとし、李 (2000) p.87 では、次のように述べている。

mima-ki と同源の *ima-ki* 地名は、『書記』の欽明紀の「今来郡」にみられ、斉明紀にも「今城谷」がみられる。大和国吉野郡、今の奈良県吉野郡大淀町にも「今木」があり、また、奈良県御所市葛城の南方にも「今城」の地名がある。「今来・今城・今木」と表記される *ima-ki* は、古代、韓国から渡海した人々の居住地として知られていた。これは群小邑落国時代の王邑名に由来したのものであると思われる。この地名は主に近畿地方にみられる。古代には、一つの王都に一つの名があったのではなく、いくつかの異名があった。(以下省略)

さらに、李氏は、次のように述べている。

任那が百済人によって建てられた百済の都邑であることから、御間城天皇の出自は、任那の王族と同族であったか、または任那の王族と同じ百済人であると思われる。御間城天皇を百済系とみる理由の一つは、任那が百済人によって建てられた国であると思われるからである。

古代韓国地名「任那」は、〈古代邑落時代の主長が居住した主邑〉に由来することが分かったが、*nima-na*、*mima-na* における *nima*・*mima* の根源は何であろうか。それは、〈主・長〉を表す **nama* にさかのぼるものと考えられる。すなわち、*nima* は、**nama* > *nima* に変化したもので、これは韓国語の〈主〉の意味であり (主、*님* *nim* : 『訓蒙字会』中1)、*na* は、〈壤・地〉の意味である。「任那」*nima-na* (> *mima-na*) は〈主壤〉〈主邑〉であり、「今帰仁」の「今帰」は、「今帰仁」の「今帰」*ima-ki* は、〈王邑〉〈王都〉の意味で、これらは同源と考えられる。

それでは、「今帰仁」の「仁」の由来は何であろうか。この地名の最古は、『海東諸国紀』(1471) の中の「琉球国之図」の「伊麻奇時利城」に求められる。従来、琉球の研究者たちは、「仁」に当たる「時利」を日本語の音読みで「ジリ」と読んできた。ここに問題があったのである。

筆者は、『三国遺事』にみられる「突山高墟村長曰蘇伐都利」の「都利」に着目したい。李(2000) p.84によれば、「蘇伐都利」という官職名は、〈主邑〉〈京〉〈首都〉を意味する「蘇伐 sə-bərə⁽¹⁰⁾」と〈尊者・主長者・王〉を意味する「都利 tori」の合成語である。すなわち、「都利 tori」は〈尊者・主長者=王〉と見なすことができ、「伊麻奇時利城」の「伊麻奇時利(いまきじり)」は、〈尊者・主長者が居住する王邑・王都〉という意味に解釈できる。もとの呼び方は*nimaki-toriであったと推定される。琉球において漢字「時利」を音読みにして「いまきじり」imaki-dziriと読み直したのである。したがって、地名「今帰仁」も古代朝鮮語にさかのぼることが分かった。音変化を考慮すると、次のとおりになる。

*nimaki-tori > *nimaki-tori > *imaki-tori (トリをジリと音読みする)

imaki-dziri > imaki-dziri > mjaki-dziri > mjaŋ/i-dziri

4. 地名「喜界島」の新解釈

永山修一氏の「文献から見るキカイガシマと城久遺跡群」(2007) p.154において、文献に見られるキカイガシマには、大別すると、次の五つの用例・用法があったとする。

- ①喜界島(喜界町)のキカイガシマ
- ②硫黄島(鹿児島県鹿児島郡三島村の硫黄島)のキカイガシマ
- ③領域名称(集合名称)としてのキカイガシマ
- ④「貴」・「喜」のイメージでとらえるキカイガシマ
- ⑤「鬼」のイメージでとらえるキカイガシマ

永山(2007) p.158では、諸史料に見えるキカイガシマの用字と出典について表にまとめているので、次頁に掲げておく。全体としては、12世紀末ころにキカイガシマの「キ」の表記が「貴」から「鬼」へと変化していることが分かる。

用字における「表記」については分かったが、「読み」についてはどうであろうか。文献においては、『おもろさうし』と『千竈文書』の「千竈時家讓状」で確認することができる。

『おもろさうし』(「第十三 船ゑとのおもろ御さうし」) p.303では、「喜界」すなわち「キキヤ kikja」と読ませている。

- 一 聞きこゑおしかさ押おしかさ笠
 鳴とよ響おしかさむおしかさ押おしかさ笠
 やうら 押おちへつか 使つかい(そつと神を迎え)
 又 喜き界いの浮う島しま
 喜き界いの盛もい島

また、『千竈文書』の「千竈時家讓状」では、「わさのしま、きかいかしま、大しま、ゑらふのしま」と読ませている。『おもろさうし』に見られる「キキヤ」は、「キカイ」から第2音節のk音が第1音節のiの影響で口蓋化し、第3音節のイが脱落したものと考えられる。したがって、もとの発音は「キカイ」であったはずである。kikai > kikjai > kikja

『朝鮮王朝実録』瑞宗元年(1453)5月丁卯(11月)条の冒頭には、「喜界島」の島名を「岐浦」と朝鮮語表記している。この文献からは、1450年当時、琉球国王の弟が岐浦島(喜界島)征討の最中であったことがうかがえる。この読みについては、村井(2008) p.121において、「浦」を朝鮮固有語で「カイ」という。ゆえに「岐浦」は音読み、訓読みを混せて「キカイ」と読むことができると注記で解説している。「浦」を訓読みで「カイ」と読んだことについては、長(2002) p.226の記述に詳しい。

表 キカイガシマの用字の変化(永山 2008: p.123より転載)

用字	出典
貴駕島	『日本紀略』長徳4年(998)9月14日条
貴駕之島	『新猿楽記』11世紀半ば頃成立
喜界島	『長秋記』天永2年(1111)9月4日条
貴海島	『吾妻鏡』文治3年(1187)9月22日条
貴賀井島	『吾妻鏡』文治4年(1188)2月21日条、3月5日条、5月17日条
貴賀島	建久3年(1192)2月28日付頼朝下文写(佐田文書)
鬼界が島	『宝物集』(1189~1200?)
鬼海島	『保元物語』承久(1219~22)頃成立、その他
鬼賀国	『漂到琉国記』(1244)
鬼界島	『平家物語』・『八幡愚童訓』など、多数
鬼界島	『中山世鑑』(明)成化2年(1466)
鬼界島	『海東諸国記』(1471成立)

浦を朝鮮語でカイと言うことは、三浦の一つの釜山浦が、フサンカイと呼ばれていたことなどによって、朝鮮へ往来していた日本人にある程度知られていたと思われる。(中略)対馬では、浦=カイと明確にとらえて使っている。それは、対馬の文書に宝徳三年(1451)正月十一日、朝鮮三浦の恒居倭(対馬から移住した居留民)に、三根(対馬上原郡峰町)の権現社壇造営の為の勧進を呼びかけるものが二通あるが、一通には「高麗三うら、こもかい、ふさん浦・うるしゃう」とし、他の一通では「高麗こもかい、ふさんかい・うるしゃう」としていることによって知られる。なお、「こもかい」は「熊浦」の訓読み(곰개 kom-kai 곰 komは熊の国訓)の訛ったものである(正式名称は齊浦であるが、熊川邑の管轄下にあるところから「熊浦」とも称された)。

確かに、古代朝鮮語で「浦」の訓は kai で間違いない⁽¹¹⁾。意味は、〈港湾集落〉のことである。それでは、「岐」は何であろうか。ただの音を借りたという説明だけでは、意味が分からないままである。筆者は、この「岐」も古代朝鮮語にさかのぼるのではないかと考える。

李(2000) p.432-434によれば、この「岐」は『三国史記』の地理志に見られる地名「岐城」と比定することができる。

- イ) 岐城郡本高句麗冬斯忽 景德王改名 今因之(『三国史記』地理2, 岐城)
- ロ) 潔城郡本百濟結己郡 景德王改名 今因之(『三国史記』地理3, 潔城)
- ハ) 比只国(『三国史記』地理4, 未詳地分)

イ)「岐城」は kara-ki の表記と見られる。「岐」の訓が karΛ であり、「城」は ki の表記であることから推定できる。ロ)「結己」=「潔城」の関係において、*kəra-ki の表記と見られる。ハ)「比只」も kara-ki の表記と見られる。「比」の15世紀の韓国語の訓が -が kalp-で (-p は接尾辞で後代に発達したもの)、その語根は kal (<*karΛ) である。「只」は ki の表記である。

李氏は以上の記述から、「岐城」 kara-ki は、〈城邑〉を表す「岐」 kara に、接尾辞の「城」-ki が接続したものと見なしている⁽¹²⁾。筆者もこの説に従いたい。したがって、「喜界島」のキカイ「岐浦」のもとの形はカラカイ*kara-kai であり、「岐」を音読みしてキカイ ki-kai となったと考えられる。「岐浦」の意味は〈城邑のある港湾集落〉と解釈できる。この見解は、最近の考古学の発見史料と合致する⁽¹³⁾。

5. おわりに

ほぼ定説となっていた「てだがあな」が、古代朝鮮語との比較によって、〈太陽神〉であることが分かった。さらに、〈東方〉とされてきた「あがるい」も〈太陽神〉であった。地名「今帰仁」も「喜界島」も古代朝鮮語との比較によって、従来の説とは異なることが判明した。筆者は、橋尾(2008) p.243において、「源がひとつで、分岐して語形変化した結果が現在の姿であるといった、系統樹的な発想で琉球語の成立を解釈できないのではないか。琉球語もひとつではない。多くのバリエーションが生まれた背景を説明するには、言語と言語が接触することで新しい語が生成される、といった接触言語的要素を紐解く作業が必要ではないだろうか。一元的な語源解釈では、琉球語を説明することは難しいと言える」と述べたが、琉球語内あるいは日本語内(共通語・諸方言も含む)の比較にとどまっておれば、いつまでも真の琉球語の姿が見えてこないのではないだろうか。琉球語の成立過程は、まさに言語接触の観点から見直されるべきだと考える。

【注】

- (1) 仲松弥秀氏も仲松(1975) p.84・p.212において、「てだがあな」を「てだが(の)穴」と解釈している(ただし、旧版は1968年発刊)。
- (2) 村山氏は、村山(1995) p.152では原始オーストロネシア語の*lapit₂を「天」としているが、p.150では「天空」としているため、表記を「天空」で統一した。
- (3) 東京大学文学部言語学研究室編(1987)のリストを転載した。
- (4) 『おもろさうし』の「第十三 船ゑとのおもろ御さうし」に見られる「あがるいのおおぬし(大主)」「てだがあなのおおぬし(大主)」は、天空の主である太陽神を再説明していることになる。
- (5) 伊波普猷(1973)「あまみや考」『をなり神の島2』東洋文庫 pp.229-230参照。
- (6) 島袋源七(1983)「今帰仁を中心とした地名の一考察」『南島論叢』 pp.166-170参照。
- (7) URL:<http://www.ma-museum.com/okiinawa/33-nakijin/12-nakijin-bunka-center.htm> ([山を歩いて美術館へ](今帰仁(なきじん)グスク)から今帰仁村中央公民館・海洋博公園/1-2. 今帰仁村歴史文化センター)参照。
- (8) 東恩納寛惇(1950)『南島風土記』(東恩納寛惇全集7) pp.633-635参照。
- (9) 谷川氏も伊波氏と同様に「今帰」を〈新来〉として渡来者と解釈している。
- (10) 再構に当たっては、李(2000) p.152にある「新羅の徐伐」の再構形*sə-bərəを参照。
- (11) *karakaiの音価については、金(2003) p.27-109の「古代韓国語」の記述を参照。
- (12) 李(2000) pp.128-129によれば、ki(岐=支=只=兮=海=伊)は、本来、一般語辞としての接尾辞であったが、〈城または村邑〉など、人々の集団居住地を表示する語として用いられ、後に〈城〉の意味に推移したものと推定している。日本の地名に見られるsara-ki(蛇穴)、tsutsu-ki(筒城)、si-ki(敷城)なども、韓国の地名における接尾辞の-kiと同源とする。さらに、李(2000) p.198において、讃岐・佐貫もsanu-kiとして捉え、(*sara > *sana >) sanu〈首〉ki(接尾辞)、つまり〈首城〉〈首邑〉と解釈している。谷川(1995) p.25には、「海人の集落に海部郷・安満郷などがつけられ、またそれが郡名にもなるのは、今も海士・海女が活躍している阿波国(徳島県)海部郡ではっきりしている。阿波国海部郡のアマ部落には由岐、木岐、志和岐、牟岐など岐のつく地名の多いことが注目される。このキが何を意味するのか、今後に残された課題である」とある。この「岐」も〈城または村邑〉を表す接尾辞-kiと考えられる。だとすれば、海人の集落名に古代朝鮮語が用いられたことに

なる。

- (13) 喜界島城久遺跡群の発掘調査については、澄田・野崎 (2007) p.46-52、城久遺跡群の意義については、鈴木 (2007) p.20-45参照。城久遺跡群を形成した社会集団について、高梨 (2008) p.144では、「現段階では特定するに至らないが、東アジア諸国動乱の時代を背景として日本列島にとどまらない範囲で、大規模の人的交流が存在していたと考えなければならない。城久遺跡群には、東シナ海周辺諸国の事情によく通じた人びとが往来していた様子が窺えるのである」と述べている。

【参考文献】

- (1) 李 炳銑 (2000) 『日本古代地名の研究—日韓古地名の源流と比較—』 東洋書院
- (2) 泉井久之助 (1975) 『マライ=ポリネシア諸語—比較と系統—』 弘文堂
- (3) 伊波普猷 (1942) 『古琉球』 青磁社
- (4) ——— (1973) 「あまみや考」『をなり神の島2』 東洋文庫
- (5) 沖縄古語大辞典編集委員会編 (1995) 『沖縄古語大辞典』 角川書店
- (6) 長 節子 (2002) 『中世国境海域の倭と朝鮮』 吉川弘文館
- (7) 金 東昭著／栗田英二訳 (2003) 『韓国語変遷史』 明石書店
- (8) 島袋源七 (1983) 「今帰仁を中心とした地名の一考察」『南島論叢』
- (9) 鈴木靖民 (2007) 「古代喜界島の社会と歴史的展開—城久遺跡群の意義をめぐって—」『東アジアの古代文化』 第130号 大和書房
- (10) 澄田直敏・野崎拓司 (2007) 「喜界島城久遺跡群の調査」『東アジアの古代文化』 第130号 大和書房
- (11) 高梨 修 (2008) 「城久遺跡群とキカイガシマ—琉球弧と喜界島勢力圏—」『日琉交易の黎明』 森話社
- (12) 谷川健一 (2007) 『甦る海上の道・日本と琉球』 文春新書
- (13) ——— (2010) 『列島縦断 地名逍遥』 富山房インターナショナル
- (14) 東京大学文学部言語学研究室編 (1987) Lists of Selected Words of Batanic Language, No. 480
- (15) 藤堂明保編 (1978) 『学研漢和大辞典』 学習研究社
- (16) 仲原弘哲 (1983) 「「今帰仁」の呼称—その語源と変遷過程をみる—」『広報なきじん』 (昭和58年9月1日付) 今帰仁村役場
- (17) 仲松弥秀 (1975) 『神と村』 伝統と現代社
- (18) 中本正智 (1981) 『図説琉球語辞典』 力富書房金鶏社
- (19) ——— (1978) 『琉球語彙史の研究』 三一書房
- (20) ——— (1990) 『日本列島言語史の研究』 大修館書店
- (21) 永山修一 (2007) 「文献から見るキカイガシマと城久遺跡群」『東アジアの古代文化』 第130号 大和書房
- (22) 橋尾直和 (2007) 「東アジアにおける琉球語・アイヌ語・日本語諸方言の比較研究」『声とかたちのアイヌ・琉球史』 森話社
- (23) ——— (2008) 「琉球語の接触言語学的要素に関する考察」『日本語の探求—限りなきことばの知恵— (村山七郎先生生誕百年記念論文集)』 北斗書房
- (24) ——— (2009) 「琉球語の比較言語学的考察—新カラジ〈頭髮〉考—」『高知女子大学紀要 (文化学部編)』 第58巻

- (25) 東恩納寛惇 (1950) 『南島風土記』 (東恩納寛惇全集 7) 沖縄文化協会・沖縄財団
- (26) 福 寛美 (2008) 『喜界島・鬼の海域ーキカイガシマ考ー』 親典社新書
- (27) 外間守善・西郷信綱校注 (1972) 『おもろさうし』 岩波書店
- (28) 宮良當壯 (1926) 『探訪南島語彙稿』 (『宮良當壯全集 7』 1980) 第一書房
- (29) 村井章介 (2008) 「中世日本と古琉球のはざま」 『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』 高志書院
- (30) ———・三谷 博編 (2008) 『琉球からみた世界史』 山川出版社
- (31) 村山七郎 (1979) 『原始日本語と民族文化』 三一書房
- (32) ——— (1982) 『琉球語の秘密』 筑摩書房
- (33) ——— (1995) 『日本語の比較研究』 三一書房
- (34) 吉成直樹 (2011) 『琉球の成立ー移住と交易の歴史ー』 南方新社
- (35) 李 基文 (村山七郎監修・藤本幸夫訳) (1975) 『韓国語の歴史』 大修館書店
- (36) Dahl, O. Ch. (1977) Proto-Austronesian. Second ed. London
- (37) Dempwolff, O. (1938) Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. III. Band. Berlin, Hamburg
- (38) Wurm, S. A and Wilson, B. (1975) English Finderlist of Reconstructions in Austronesian Languages (Post-Brandstetter). Canberra
- (39) Zorc, R. David. (1971) Proto Philippine Finder List. Cornell University

【参考 URL】

<http://www.ma-museum.com/okiinawa/33-nakijin/12-nakijin-bunka-center.htm> ([山を歩いて美術館へ] (今帰仁 (なきじん) グスク) から今帰仁村中央公民館・海洋博公園 / 1-2. 今帰仁村歴史文化センター